



日本海海戦の行われた海域で献花する神島宮司



7月祭事暦

- 毎月1・15日 ^{つぎひ}月次祭
 - 午前10時 高宮祭 第二宮・第三宮祭
 - 引き続き 宗像護国神社 月命日祭(1日) 巡拜(15日)
- 午前11時～ 総社祭
 - 浦安舞 奉奏(1日)
 - 豊栄舞 奉奏(15日)
- 22日 午前9時 中津宮七夕揮毫会 於=筑前大島 中津宮
- 31日 午後5時 夏越の大祓神事 於=神門前 引き続き 夏越祭 於=本殿

日本海海戦一〇〇周年記念
沖津宮現地大祭
約二三〇名が渡島参拝。離島後には
海戦の行われた海域で献花も

日本海々戦から一〇〇周年の節目となる五月二十七日、年に一度一般の方が参拝出来る恒例の『沖津宮現地大祭』が、沖ノ島で斎行された。

三月下旬より、全国から申し込みをされた方々の中から、厳正に抽選し、選ばれた二三〇名の参加者が、前日の二十六日に筑前大島に渡島。同島の中津宮で受付を済ませ、午後六時から行われた『沖ノ島渡島安全祈願祭』に参列し、無事渡島を祈念した。引き続き境内で説明会が行われ、一〇十班に分かれた参加者は各班ごとに担当神職の説明を受け、その夜は各自大島の宿



曇一つない空の下、全員直ちに海中で禊をさせていただきました

泊施設に参籠した。翌朝、朝焼けの中、先ず第七管区海上保安本部灯台見廻り船『げんうん』が出港。過去何度か波の高さにより途中で引き

本年戦後六十年を迎える、人生の歩みにたとえれば還暦を迎えたことになる。しかしまたまたと言うべきか、靖国問題、教科書問題、或いは領土問題等、戦後の歴史認識をきちんとすべきであるとの圧力が、内外を問わずかまびすしい。外圧もさることながら、いまだに国内からもこのような声がかかるのは何故だろうか。▼戦後のGHQ指令による教育改革で、民族の自尊を崩壊させるべく、「修身」「国史」「地理」が削除され、加害者意識を徹底的に植え付けた教育が、まだまだ影響していると云わざるを得ない。毅然たる態度で国家観を主張する気概を喪失させ、迎合の気風を育んでしまった▼この核心を踏まえて論じなければ日本人としての誇りも、また建国以来の我が国の歴史も理解できず、確固たる信念が醸成されないうらう▼本年十月、九州国立歴史博物館が開館する。東アジアと我が国との交流を基本構想にその運営がなされると聞いている。現在の情勢を鑑みると、一衣帯水の歴史を連綿と継承して来た地域だけに、あらゆる角度から国内外への発信と友好の促進に寄与する期待は大なるものがある。その開館が待たれる。(M.T)



神具・装束 結婚式場調用品

福岡店 〒812-0045福岡市博多区東公園2-31 電話 福岡(092)651-9456番
本店 〒600-8231京都市下京区油小路六条北入 電話 (075)341-3341(代)~4番 (075)343-3341番

木組の家 匠の技

総合建築業 株式会社 弘江組
〒811-3406福岡県宗像市稲元1025 電話(0940)32-2567



沖津宮での現地大祭

返し、渡島が中止になったこともあるが、今年も昨年引き続き波高は一時的に「ベタ風」で、すぐに出港許可が出され、午前七時渡海船「しおかぜ」をはじめ全船が出港した。

大島に残る見送りの方々が手を振る中、一行は沖ノ島を目指した。波のない穏やかな海上を進むこと

約一時間半、目前に沖ノ島が現れた。到着した参拝者から順次、一糸まとわぬ姿になり、海中で禊を行い心身を清め、原生林の生い茂る参道を沖津宮本殿へと進んだ。

午前十時前に現地大祭を斎行。御神前には全国各地の参拝者から御神酒・奉獻品がお供えされ、神島宮司が国家・皇室の安泰、そして日本海々々

戦で命をかけて戦った日露両国の兵士の慰霊・世界平和を祈る祝詞を奏上。次々に各代表者が玉串を捧げて、敬虔な祈りの中祭典は滞りなく終了した。

その後、波止場で沖・中両宮奉賛会（佐藤千里会長）、翼賛会（上野美実会長）の皆様により調理された刺身、煮魚、その煮汁で食べるソーメンに一同舌鼓を打ちながら、和やかな直会の一時を過ごした。

正午、参加者は各船に乗り込み、日本海々々の現場となった沖ノ島北西の海上で停船、神島宮司他各船の代表が菊花を捧げ、船は一分間汽笛を鳴らし参列者一同、黙祷を捧げた。その後、沖ノ島を一周し、神秘的な景観を拝しながら帰路についた。

一方、沖ノ島に渡島出来ない女性・子供は、大島の沖津宮遥拝所での祭典に参列し、遥か沖ノ島に祈りを捧げた。

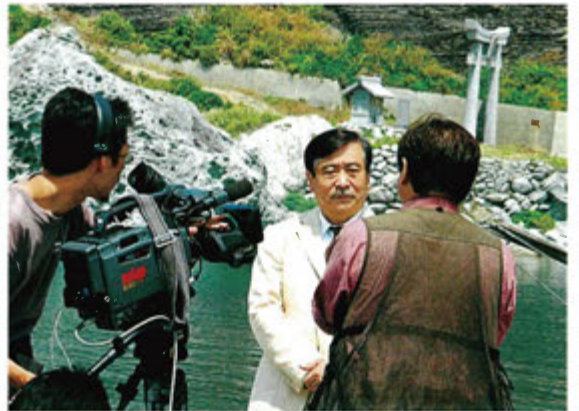
午後二時、全船大島港入港、波止場には大勢の出迎えの方々があり、参列者は感激を新たにしていた。こうして、一人の病氣・ケガ人もなく今年の沖津宮現地大祭は終了した。

尚、報道関係は、TBS系のRKB毎日放送、フジテレビ系のテレビ西日本放送、朝日新聞社、文芸春秋社が取材を行い、夕方のニュース、朝刊等で大祭の様子が伝えられた。

また今回は番組制作の為、吉村作治早大教授も再来島。ダイドードリンコがスポンサーとなり、博



沖ノ島



吉村先生も来島され、番組の収録をされました

報堂・RKB毎日放送が当社の年中祭事を伝える番組を制作しています（詳細次号告知）。完成はまだですが、撮影は順調に進んでいます。ご期待下さい。



波止場での直会



魚を煮た後の煮汁。これでソーメンを食べると絶品です。



透き通る程きれいな水の中での禊は清々しいものでした

明治三十八年（一九〇五）五月二十七〜八日に、沖ノ島の北西で行われた日露戦争最大の海戦。日露開戦より敗戦を重ねたロシアは、明治三十七年十月当時世界最強といわれたロジェストウェンスキー中将を司令長官とする「第二太平洋艦隊」（バルチック艦隊とは日本側がつけた通称）を編成し、ウラジオストク港に向けて出発させ、戦況回復を企てた。

東郷平八郎司令長官率いる日本連合艦隊は、バルチック艦隊がウラジオストク港に達する前に全滅するため、連日作戦会議、猛烈な訓練が行われ、翌年明治三十八年一月二十一日鎮海灣の前線基地（現＝韓国）への集結が発令された。

そして五月二十七日未明、西対馬海峡で哨戒中の「信濃丸」から「敵艦見ゆ」との報告を受け、午前九時四〇分連合艦隊は「天気晴朗なれども波高し」の第一報を大本営に打電し、鎮海灣から出撃した。

沖ノ島近海で敵艦を認めた東郷長官は、「皇国の興廃此の一戦に在り、各員一層奮励努力せよ」の「乙旗」を掲げ、全軍の士気を鼓舞した。やがて敵艦隊と対峙し距離を詰めていく。双方の戦力は日本が主力艦（大口径砲をもつ戦艦）四隻に対し、ロシアは新式が七隻に、旧式が四隻と倍以上の戦力差があった。

午後二時四〇分、東郷長官は敵艦隊との距離を六五〇メートルまで近づけるといふ、海戦史上初めての「敵前回頭戦法」という画期的な海戦術で臨んだ。猛烈な訓練の成果もあり、連合艦隊から放たれる砲撃の命中率は高く、敵艦隊は戦列を乱して右往左往し、わずか三〇分で勝敗はつき、その後

日露戦争

は、主力部隊や補助部隊が入り乱れての海戦が、翌二十八日まで続いた。戦果を統合すると、ロシア主力艦三八隻の中、沈没二隻、降伏・拿捕七隻、残り三隻の小艦艇が目的のウラジオストクに到達したのみであった。日本の損害はわずかに水雷艇三隻のみであった。現在でも、沖ノ島近海で漁をする漁師の話では、魚群探知機に沈んだロシア船の船影が映るといふ。またこの海戦では、ロシア側戦死者四、五四五名、捕虜六、一〇六名、日本側の戦死者一六名であった。

このように、日本海海戦は世界海戦史上稀なる完全勝利であり、日露戦争を勝利に導く上で決定的な役割を果たした。

さらに有色人種が白人に対して初めて勝利した瞬間であり、世界中に驚愕のニュースとして伝えられ、アジア・中東諸国では歓喜の声が湧き起こったが、当時同盟を結んでいたイギリスでは歓喜の声は聞こえなかった。当時、ロシアの植民地であったフィンランドでは、日露戦争を契機に独立したため、東郷元帥を称えアミラーリ社から「東郷ビール」という同元帥の肖像が描かれたビールが現在も販売（今はオランダで製造販売）されている。

また、海戦当日は霧が立ち込め視界が悪かったが、戦闘開始時には突如霧が晴れ視界が開けたという、同元帥はこの神恩に感謝し、戦後当大社に同元帥の指揮された戦艦「三笠」（現在は横須賀港に展示）の羅針盤と、「神光照海」という揮毫を奉納され、現在でも当大社神宝館で収蔵展示している。

フランス人画家 マークエステル・スキヤルシャフィキ氏

油彩画を奉納

五月十四日、日本神話を題材にした油彩画を描いている、フランス人

画家のマークエステル氏が来社し、宗像三女神を描いた絵を奉納された。

マークエステルさんは一九七〇年に外交官として初来日、日本語を学ぶ中で古事記に出会い、日本神話の面白さに魅せられたとのこと。画家に転身してからは、日本神話を絵の題材にもするようになり、フランス

のアトリエで制作をされている。

今回、福岡市である作品展のため来日し、以前から参拝を願っておられた当大社に参拝、午前十一時より

奉告祭を斎行し、神話の中でも有名な天照大神と素戔嗚尊の誓約から、当大社の御祭神である宗像三女神が誕生する場面を描いた六〇号の作品を奉納された。

奉告祭後、神島宮司ら職員と共に会



奉納報告祭

食し、神話やフランスの話と親しく懇談し、マークエステルさんは「神話が残る国は世界でも少ない。国外



奉納された油絵「宗像三女神の誕生」

の人は勿論、日本人にも日本文化の素晴らしさを見直してほしい」と語っていた。



神島宮司とマークエステル・スキヤルシャフィキ氏

三十年前の遷座祭と同日に
 第二宮・第三宮
 三十周年記念祭



第二宮・第三宮遷宮祭で奉奏された主基地方風俗舞(昭和50年5月20日)

五月二十日午前十一時より、当大社第二宮・第三宮で、神島宮司以下全職員、責任役員、両宮造営の普請に携わった(株)弘江組の花田社長らが参列し、遷座三十周年記念祭が斎行された。



全職員で参列しました(平成17年5月20日)

先ず、第二宮より祭典が開始され、祭主の堤祭儀部長が御造営三十年を奉祝する祝詞を奏上、神島宮司、深田責任役員代表、弘江組の花田社長らがそれぞれ玉串拝礼を行った。続いて第三宮も同様に祭典があり滞り無く終了した。祭典後、直会が催され一同造営事業から三十年に至るこの歳月と、当時の出光復興期成会々長を始め先人の功労に想いを新たにすると共に、造営三十周年を祝賀しその幕を閉じた。

田心姫神(沖津宮)を祀る第二宮、湍津姫神(中津宮)を祀る第三宮は、宗像大社が衰微していた中世から、辺津宮本殿裏の末社群に合祀されていたが、これを元の鎮座地に遷座いただくことと、三十年前の昭和五十年「宗像大社復興期成会(当時会長 故出光佐三氏)」の『昭和の大造営』の事業として取り組まれた。

昭和四十九年十一月、第六十回神宮式年遷宮(次回の第六十二回は平成二十五年)に際し、皇大神宮別宮である伊佐奈岐宮・伊佐奈

弥宮の古材を御下賜いただき、翌年の昭和五十年四月に竣工。五月二十日午後八時から、御神璽に旧殿から新殿に遷座いただく「遷座祭」が斎行された。

三十年の歳月を経た両宮の記念祭にあたり、周辺境内樹木の剪定整備、社殿の清掃が念入りに行われ、遷座祭の行われた日と同じく、一同斎館前庭に列立、太鼓の合図と共に参進し祓舎にて修祓、次いで肅々と歩を進めた。



30周年記念祭(平成17年5月20日)



建設中の御社殿(昭和49年)



遷座祭に先立つ『新殿祭』(昭和50年5月6日)

第八回 筑前玄海魚まつり開催

六月二十八・二十九日の両日に亘り宗像市の鐘崎・神湊の漁港で「筑前玄海魚まつり」が本年も開催された。

この催しは、玄界灘の新鮮な魚を一般の方に満喫して広く知ってもらおうと地元の漁業・観光業者、地元

宗像を愛する有志が中心となり今年で八回目の開催となる。期間中当大社駐車場から無料巡回バスが運行され両会場周辺の渋滞緩和に貢献した。

両日とも好天に恵まれ、両会場共に大変な人出となり、主催者側の発表によると今年



大人気の「魚つかみどり大会」(鐘崎会場)

の来場者は五五、〇〇〇人でありこのイベントの定着に伴い着実に来場者は増加の一方となっている。メイン会場となる鐘崎漁港では市内ホテル、旅館の食事券や鮮魚などが当たる「餅まき」の他、宗像地域の特産品販売や地元住民がふるさと料理を提供する「鐘崎ふれあい食堂」が開店し賑わいをみせた。目玉イベントの「魚つかみどり大会」では特設プールに地



ステージイベントも大盛り上がりでした(鐘崎会場)

元漁師が水揚げしたばかりのアジ・サバ・タイ・イサキなどの魚が放流され参加の子供たちは服をびしょびしよに濡らしながら夢中で魚を追いかけた。

サブ会場の神湊漁港では玄界灘ショートクルージング、地引網、小アジ釣り等の多彩な催しに加え、魚販売や玄界灘の新鮮な海の幸を使った「海鮮鍋」も販売されこちらも大盛況となり、訪れた大勢の家族連れは笑顔で家路についた。

宗像市の海と魚をPRするこの「魚まつり」の今後の更なる盛り上がり期待したい。

奨学金受給生便り



第46期 筑紫女学園高校 一年(自由ヶ丘中学卒業) 井上 優美

私は生まれてからすぐに宗像大社へお参りに行きました。なので宗像大社は私が一番頼ることのできる場所です。今回、中学校から、宗像大社奨学金を頂けると聞き、とてもうれしく、そして誇らしいと思いました。

みどりの日に行われた式典で、私は改めて、宗像大社は緑の素晴らしい、歴史のあるところだと思いました。

このようなありがたい奨学金を受け取ることができ、これからは感謝の気持ちと責任感を持って、しっかりと高校生活を過ごしていきたいと思っています。

また、最近では色々な殺人や誘拐などの悪い事件が起きていてとても心配でなりません。今後日本が心の余裕がなくなっていくてしまい、暗い国になってしまいう前に、私たちの世代が頑張って社会をより良くしていければ良いと思います。

将来は何か人の役に立てて、幸せで安全な日本にしていけるような職につきたいと思っています。これから頑張って、勉強やスポーツをしてゆきます。

第45期 光陵高校 二年(玄海中学卒業) 成清 雄太

私の大社での思い出は受験の前月に、この宗像大社に友達と合格祈願に来たことです。

おみくじを引くと、大吉で友達と喜んだのをよく覚えています。神社の鳥居に、石を投げて乗せたりしていました。思えば何か大きな出来事があるたびに宗像大社でお祈りしていたような気がします。

受験当日も、大吉のおみくじを持って、試験に望みました。合格発表前日も、友達と足を運んでお祈りしました。本当に合格した時は、うれしかったです。奨学金も支給していただき、宗像大社と私は切っても切れない縁があるようです。大学受験をするときも、結婚や会社勤務するときも、きっとこの宗像大社でお祈りをすると思います。

これからの自分に、宗像大社に恥じぬように生活していきたいと思えます。宗像大社に来て何だか落ち着くのは、きっと自分の家に居るような感覚になるからだだと思います。どこか安心できる。ここはそんな場所です。

宗像市合併記念事業

宗像ユリックスプラネタリウム 季節番組

『星めぐり&天の川～大島の星物語～』

宗像市合併記念事業の一環として、宗像ユリックスプラネタリウムで、当大社中津宮の『七夕伝説』をモチーフに、季節番組が制作されました。

対象はお子様ですが、大人も充分楽しめる番組となっております。

夏の一日、鐘崎の『石ころ』、沖ノ島の『オガチ』、大島の『バクチの木』が、大島を舞台に繰り広げる愉快的な物語を御覧になってみてはいかがでしょうか。



番組タイトル 星座めぐり & 天の川～大島の星物語～

期 間 6月11日(土)～9月4日(日)

休 館 日 月曜日(祝日の場合は翌平日)

場 所 宗像ユリックス本館2階 プラネタリウム

番組内容 大島で「星祭り」の時期、鐘ノ岬から自分の意思とは別にカモメに運ばれた「石ころ」、沖ノ島から想う相手を探し毎年やってくる「トリ」(オオミズナギ鳥)、樹齢200年のバクチの老木「バク」が、中津宮、天の川、牽牛・織女神社を舞台に繰り広げる、宗像地域をモチーフにした物語。



【番組開始時刻】

6/11(土)～7/20(水)・9/1(木)～9/4(日)

	11:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
日・祝日	こども番組	季節番組	こども番組	季節番組	季節番組	-
土曜日	-	季節番組	こども番組	季節番組	季節番組	季節番組
平日	-	-	-	-	季節番組	-

7/21(木)～8/31(水)

	11:00	13:00	14:00	15:00	16:00	17:00
日・祝日	こども番組	季節番組	こども番組	季節番組	季節番組	-
土曜日	-	季節番組	こども番組	季節番組	季節番組	季節番組
平日	-	季節番組	こども番組	-	季節番組	-
8/9(火)～12(金)、 8/16(火)～19(金)	こども番組	季節番組	こども番組	季節番組	季節番組	-

【観覧料】 3歳以下のお子様は無料ですが、保護者(おとな)の同伴が必要です。

季節番組 「星めぐり&天の川～大島の星物語～」		
	個人	団体(30人以上)
幼児(4歳～)	100円	1人につき 80円
小中学生	150円	” 120円
おとな	310円	” 250円

こども番組 「ルンちゃんとはかせのうちゅうりょこう」	
4歳以上	一律 100円

【座席数】 97席





ウラジオ艦隊の砲撃を受ける常陸丸(明治37年6月15日)

(続)

浜の寄物

194

いしいただし



遠賀郡若屋町浜崎海岸に「常陸丸殉難勇士之碑」が建っている。

今年(平成17年)は日本海海戦一〇〇年目であり、

大社でも沖ノ島で盛大な現地大祭が行われた。常陸丸ほかの撃沈は、日本海海戦の前哨戦というべきものであった。

明治三十七年(一九〇四)

六月十四日、広島・宇品を出港した常陸丸(六、一七五トン)は僚船佐渡丸とともに朝鮮半島へ兵員と補給物資を運ぶために出航したのである。(乗員・将兵合わせて一二七名 軍馬三二六頭がのっていた)

六月十五日に玄界灘に入り、午前十時ごろ沖ノ島の南西七、八里のところを航行していた。そこに露のウラジオ艦隊の装甲巡洋艦「ロシア」、「グロモボイ」、「リュウリック」の三艦があらわれて、砲撃をし、常陸丸は航行不能となり、午後三時に沈没した。常陸丸

の将兵の多くが戦死、生存者は僅か百余名であった。佐渡丸も魚雷や砲撃を受けて沈没。和白丸は死傷者を多く出しながらも辛うじて沈没はまぬがれた。

沈没した常陸丸のものとみられる食糧や缶詰類、若屋海岸に漂着している。

露の艦隊はウラジオ艦隊と呼ばれ、旗艦ロシアは一万三千八百トン。戦艦に匹敵する大きさの巡洋艦である。またリュウリックも一万トン強の巡洋艦

で、露で最初に建艦された装甲巡洋艦である。他に巡洋艦2、(仮装巡洋艦1)、水雷艦十五隻で構成され、ウラジオストックを拠点にして、輸送補給の破壊を目的とし、日本海から対馬海峡を中心に活動している。一九〇四年二月から八月までの間に六回も出撃し、第六回では津軽海峡を通過し、太平洋に出て房総沖に出現。商船の臨検や日本船など七隻を撃沈している。

そのウラジオ艦隊を迎撃し行動を封ずべき任務をおびたのが、上村彦之丞中将の第二艦隊である。旗艦は「出雲」で吾妻・常盤・磐手の一万トン弱の一等巡洋艦で編成されていた。上村艦隊はなかなか露艦を補促できず、国民の間には不安と批難も起こりはじめていた。

一九〇四年八月十四日、朝鮮半島の蔚山東海上で、ついにウラジオ艦隊

を発見。露艦より高速の上村艦隊が急接近し砲撃戦を開始した。リュウリックは五〇発以上を被弾し沈没。他の二艦も被弾しながらもウラジオストックに帰投している。この時リュウリックの六二七名が日本艦艇に救助されている。戦争の行方を決する食料、武器の補給、兵員の確保はウラジオ艦隊の壊滅でひとまず日本側も、国民にも安堵感を与えた。なお常陸丸の沈没から

平成十七年度 夏越の大被神事 御案内

恒例の夏越祭が近づいて参りました。このお祭りは、大被神事を中心に行われ、夏季に流行する悪疫を除去し、皆様方の心身の罪・穢を人形に託して祓い除き、清々しい気持ちで、毎日を無事に過ごしていただくための祈りを込めた神事でございます。本年も左記の通り斎行致しますので、皆様お誘い合わせの上御参拝下さいますよう御案内申し上げます。

一、日時

七月三十一日

午後五時

一、場所

大被神事(神門前)

夏越祭(本殿)

氏子・崇敬者 各位

宗 像 大 社



二一日目の七月五日に大法会がいとなまれている。昭和十七年(一九四二)には常陸丸殉難勇士之碑の設立準備がすすめられ翌十八年完成した。参考文献 『若屋町誌』『日露戦争全海戦』『日本海海戦の真実』

第五二七回

宗像大社歌会詠草

大野展男選 毎月25日メ切



宗像市 日の里 大和 美由紀

山峡のせせらぎ聞きて育ちたる黒い子犬が家族になりぬ

(評) のびのびと育ったであろう仔犬の場所を提示した上句を受けての下句の展開。楽しい想像の世界がひろがる秀作である。

宗像市 城西ヶ丘 石橋 妙子

農道を二頭の馬の進むさま野良犬二匹遠く見てをり

(評) この馬は乗馬クラブの馬であろう。それを見ている野良犬、手入し育てられたものと、捨てられたもの。大と小、その対比を「二」という数字できつちりと結んでいて、巧みな見立てである。

宗像市 池田 森 龍子

十までを数へて風呂を上がりしが跳ねる足音こちらに向かふ

(評) 「孫」という言葉を使わないで詠うと、でれでれした孫可愛いという歌の弊害から抜け出せる。と永田和宏氏は言っているが、森作品が正にその通りで、孫の語は無くとも澁刺とした男の孫の姿が私達の眼前に浮んでくる。孫は来てよし帰ってよし。の言葉と共に。

福岡市 南区 井田 有久衣

訪へる男孫は彼女を伴いてビール片手に結婚するよ

(評) 井田さんの孫はもう成人した孫。あつげらかんとしたいかにも現代風な二人に戸惑いと喜びが相半ばしている作者のさまが見え、読む側も苦笑と同情が相半ばする。

宗像市 大島 越智 治子

昨日吹きし疾風にのりしかつばくらめ鳥のどこにも飛びはじめたり

福津市 在自 佐々木 和彦

八十までもし生きれたら二十年か随分短歌が詠めると想ふ

宗像市 王丸 小方 玲子

職退きて会う人もなき雨の午後音ひそめ弾く「さくら貝の歌」

宗像市 大井 木原 ふさ子

足をもつお玉杓子をすくひあぐ梅もぐ事に飽きし童ら

福津市 中央 中村 勇

レジ前に釣銭落し拾ふのに手間取りたりき仕方なし年は

宗像市 田野 森 つるの

花咲きしひとつばたこは高々と庭の王者となりし貫禄

うきは市 浮羽町 向 則正

乗りなれし中古の自転車悪くなり捨てがたきまま軒下におく

宗像市 田野 森 甲子

青空にもゆる大社の大き樟若葉の息吹聞こゆることし

宗像市 朝野 藤井 浩子

今年また結婚記念日忘れをり日記を繰れば列車事故のみ

宗像市 日の里 石松 弘次

悲惨なる電車の事故よあわれあわれエゴなる人らの所為と言ふべし

宗像市 東旭ヶ丘 天野 玲子

階段をまだ駆足で上り下り出来る幸せ思うこの朝

福津市 中央 池浦 千鶴子

妻の役に母親の役おりませて旅立つ夫にこまこまといふ

宗像市 鐘崎 安永 久子

娘のくれし母の日の膳今日一日至福の刻と胸あつくをり

宗像市 光岡 森田 富佐子

豚肉と葱を炊きませ食すると虫歯にならぬをテレビにて知る

福津市 光陽台 香月 照子

やすらぎと荒々しさにとまどいて自然の中に生かされている

選者詠

若葉せしものの匂ひす風襖なして茂れる鐘の岬は

佐太郎に終二にならう吟行にきたりし吾ら春日の今日を

絞られし鯛網のなかまじりをり迷惑



宗像大社 歌会

俳句作品集(五〇二)

宗像市 東郷 宗風社俳句会

紙魚走る軍隊手帖従軍記

吉田 湧水

吾が命惜しむにあらず春惜しむ

吉田 杏子

人待つにあらねど花の下にあり

三浦美千代

走り梅雨脂の吹き出る一樹あり

田中 雨葉

樟若葉寺苑に寂と塚一基

木原 房子

紫陽花を括るや紐に紐足して

花田いつ枝

引潮に月待ち蟹の二三匹

井上 嘉治

五月の日バスより眺む青葉かな

白土 凌一

編集後記

沖ノ島勤務で二〇人以上の方が来島する時でしたので、ひたすら草刈り、掃除の日々でしたが、十日間誰一人来なかつた二月の勤務と違い、いろいろな方とお会いすることができ、充実した日々を過ごせました。なかも取材関係は、記者なら編集委員、カメラマンなら写真部長、編集者なら取締役等々、その世界でもトップクラスの方ばかりでした。年齢も小生より二十歳近く年上で、いつものベースに持ち込めませんでした。そこは若僧として、一晩かけて徹底的に考えをぶつけさせていただきました。▼帰社後、送られてきた礼状・記念写真を拝見し、少しは解っていただけかなと思います。(M.O)

発行所 宗像大社社務所

〒811-3505 福岡県宗像市田島
電話 0940-62-1311(代)
発行人 伊藤佳和
編集人 大塚宗延
制作 ジーエータップ
印刷 セネラルアサヒ

定価1年送料共1,000円